

「大腸がん検診（便潜血検査）」のキーマッセージ

1. **40歳以上**（~74歳）の方は、**毎年**、便潜血検査を受けましょう
2. 早期のがんは自覚症状がなく、検査なしに早期発見は困難です
3. 大腸がんは、日本人が罹患するがんで最も多いです。

便潜血検査とは

便に血が混じっているかを調べる検査です。便の表面を棒で擦って提出する簡易な検査となります。

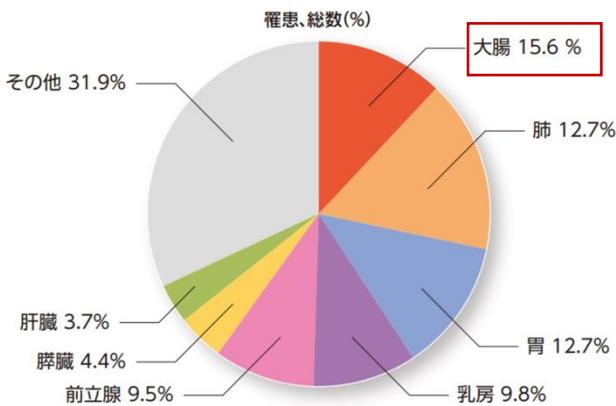
便潜血陽性の結果を受け、大腸カメラで出血源の精密検査・加療することで、**大腸がんによる死亡率低下**につながることを示されています。

「大腸がん検診ガイドライン2024年」では「**40歳以上**（~74歳）で原則、**毎年実施**」が推奨されています。

大腸がんについて

- ・大腸がんはがんの中で最も罹患人数が多いです。一生のうち、日本人**男性の11人に1人、女性の13人に1人**が大腸がんと診断されます。
- ・男女とも**40歳ごろから罹患人数が増え、70代から80代でピーク**に達する。
- ・食生活の欧米化（高脂肪・高カロリー・野菜不足）、運動不足の影響もあり、罹患者の増加、若年化を認めます（この20年で大腸がんによる死亡数が1.5倍に増加）。

がん罹患の部位ごとの内訳(2019年)



大腸がんの年齢階級別罹患率(2019年)



大腸がん検診「便潜血検査」のすすめ

早期がんは検査なしに早期発見困難

早期がんは症状がほとんどないため、自覚症状を頼りに早期発見に繋げることは困難です。大腸がんの症状（血便、腹痛、下痢、体重減少など）を自覚する場合は進行がんである可能性が高く、治癒できる見込みが低下してしまいます。

早期がんであれば90%近くは治すことができるため、「**便潜血検査**」を受け、**症状が出る前の早期発見**に努めることが重要です。

早期がん



- ・自覚症状は乏しい
- ・治癒できる可能性が高い
- ・検査でしか発見困難

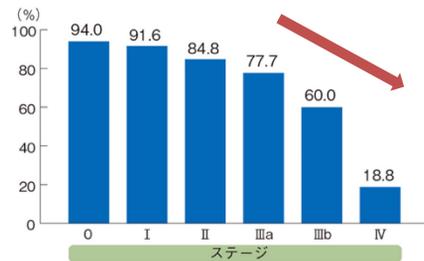
出典：大阪急性期・総合医療センター 消化器外科 HP

進行がん

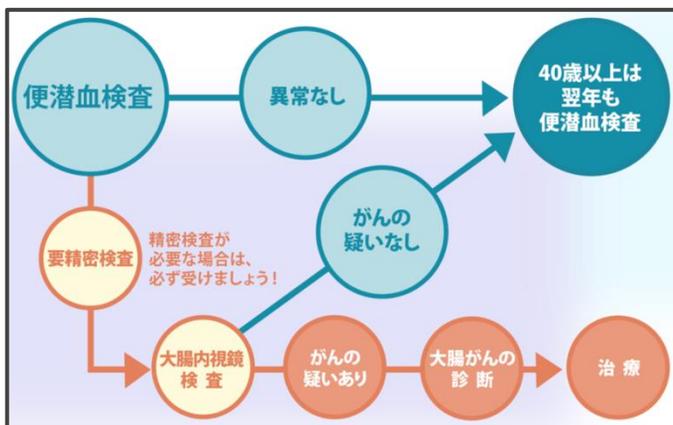


- ・症状を自覚することがある
- ・治癒できる可能性が下がる
- ・侵襲が大きい治療となる

ステージ別の5年生存率



便潜血検査で陽性となったら



便潜血検査で陽性だった場合、**大腸カメラでの精密検査を必ず受けましょう。**

大腸カメラを実施することで大腸がんの早期発見と早期治療が可能になります。

出典：大阪急性期・総合医療センター 消化器外科 HP